



独立行政法人 文化財研究所  
奈良文化財研究所  
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1  
<http://www.nabunken.jp/>

## 西大寺食堂院の井戸

西大寺は、奈良時代後半に造営された寺院で、その規模は東大寺にも匹敵したと言われています。都城発掘調査部では、今年5月から約半年間、西大寺食堂院跡推定地の発掘調査をおこないました。その結果、これまでまとまった資料のなかった西大寺食堂院の中核部の遺構を検出し、古代寺院の謎を解明するための手がかりを得ることができました。

注目される遺構は、巨大な井籠組の井戸です。この井戸は食堂院の台所である大炊殿の南東に位置します。大きさは内法2.3m以上あり、これまで平城京で検出された井戸で最大の規模を誇ります。

井戸枠は5段分、合計20枚が残り、大きいものは長さ約260cm、幅約60cmもあります。表面にはチョウナやヤリガンナなどの加工痕がみえます。また、年輪年代測定の結果、767年に伐採された部材が含まれていることがわかりました。『続日本紀』によると、この年に造西大寺司が任命されており、これらの木材は西大寺造営に伴い用意されたものと考えられます。

発掘調査中、井戸の埋土に多くの遺物が含まれていることがわかり、土ごとコンテナに入れて研究所に持ち帰り、遺物の洗浄・整理作業をおこなうこと



井戸検出状況(南西から)

になりました。コンテナの数は1000箱以上。作業が終わるまで1年以上かかるとみられます。

埋土からは木簡をはじめ、土器、瓦、木製品、植物など多種多様な遺物が出土しています。主な遺物として、食堂院の機能や運営をうかがわせる木簡や、正倉院に伝わるものとそっくりな奈良三彩、多量の製塩土器、奈良時代後半の軒瓦、箸や杓子といった食事具などがあり、きわめて食堂院らしい遺物といえるでしょう。そのほか、「栗」「瓜」「米」といった具体的な食品名が書かれた木簡とともに、実際に栗の皮や瓜の種などが出土しています。当時の西大寺僧の食生活の様が目に浮かぶようです。

このように、今回検出した井戸は西大寺食堂院の姿を目の当たりにさせるだけではなく、古代の技術や寺院経済、寺内組織などを考える上で、きわめて貴重な資料といえます。さらに、これらの資料が発掘調査による出土品である点は大変意義深く、文献資料に乏しい古代西大寺史研究を、確実に進展させるものとして期待されます。

今回の発掘調査の概要と、井戸から出土した遺物の一部は、11月21日から平城宮跡資料館で展示しています。ぜひ、多くの方に最新の発掘の成果をご覧いただきたいと思います。

(都城発掘調査部 大林 潤)



洗いを待つ井戸の土たち